

# 子ども療養支援協会通信

Japanese Association for Child Care Support

Vol. 3

## 平成 24 年度子ども療養支援士認定コース研修生のご紹介

平成 24 年度の実習生として 5 名の方の研修をスタートしました。今年度も多くの募集があり第一次選考、第二次選考を経て今年度の研修生となった方々のご紹介をさせていただきます。

5 名の方々のこれまでの経歴は様々ですが、4 月から始まった 14 日間の講義の中でお互いの結束を固め、5 月からの実習に旅立ちました。実習は、北海道大学病院、順天堂大学附属順天堂医院(100時間の横須賀うわまち病院を含む)、大阪府立母子保健総合医療センターで行っています。



2012年4月18日 平成24年度子ども療養支援協会開講式

(於:順天堂大学)

### 上林 史代

北大病院では、CLSは小児病棟に属さず、緩和ケア室を拠点とし、一般病棟に入院している子どもとその家族を支援しています。一定の決まった時間しか子どもと関わることはできませんが、その時間内で濃縮した関わりが成されており、子どもたちは CLS が病棟へ来ることをとても楽しみにしています。北大病院で実習をし、子どもとその家族にとって、入院環境に

身を置くことは、大きな侵襲があるということを感じてきました。家族と日常を送っている家から病院へ向かう時・病院に着いて病棟へ上がる時・病棟へ入って医療職と対面した時・入院生活。どの過程をとっても、不安と緊張が伴っているのだと思うのです。また、検査や処置が日常的にあり、子どもはもちろん、付き添っている母親も不安いっぱいです。私が北大病院で出会った泌尿器科の A 君は、病棟では、いつも笑顔で CLS・実習生と遊んでいる 5 歳の男の子です。A 君は、3 週間

ほどの入院で、母親は5時間離れた自宅にA君の姉を残し、A君の入院に付き添っています。ある日、A君のMRI検査に付き添った時のこと。普段、病気のことはほとんど口にしないA君が、検査室へ向かう前に、「これからどんなことするの？何の検査なの？」と、CLSへ聞きました。CLSが検査内容を説明すると、A君は納得した様子でエレベーターへ乗り込み、軽い足取りで検査室へ向かうことができました。しかし、検査室へ到着するとA君の表情が強張ります。そして、「ママも一緒に来て。」と、呟くのです。その発言を受け、CLSは、母親と一緒に検査室へ入れるようにすること・A君が好きな音楽を聴きながら検査を受けられるようにすることを、看護師と調整しました。結果、A君は母親と一緒に検査を受けることができ、検査が終わった後は「検査、終わったよ！できたよ！」と、嬉々として病棟へ戻って行きました。母親の表情からも、安心した様子が伺われました。A君が不安なことをCLSへ訴えてこそ、CLSはA君と母親にとって最適な環境を整えることができたのだと思います。A君のMRI検査における関わりを通じ、病棟から一歩出た後も一緒に付き添ってくれるCLSの存在が、子どもと母親にとって大きな支えとなっていることを実感しました。そして、子どもが「自分の身に起こる医療に対して不安や疑問を口に出せるよう、関係性を築くこと」「入院生活において生じるストレス／不安にスポットを当て、その要因を軽減するために、病棟・外来などを点ではなく線で子どもと家族を支援すること」は、この職種の特徴であることを学びました。北海道へ身を移し、慣れない土地で不安が多かった5月の始め、私を支えてくださったのは、病棟で出会った子どもたち・家族、わかばカフェの方々、そして緩和ケア室で温かく迎えてくださった皆様方でした。残りの実習も、大きな支えに感謝をしつつ、多くのことを学んでいきたいと思っています。

### 本田 真己子

今年1月、「合格(実習地:札幌)」と書かれた通知を受け取ったその日は、私の人生におけるひとつのターニングポイントとなりました。高校生のとき、初めてチャイルド・ライフ・スペシャリストという職業を知り、その仕事内容に深い感銘を受けてから、5年の月日が経っていました。札幌という、生まれて初めて訪れる土地に対する不安もありましたが、それ以上に、自分に与えられた新たな学びの場に対する感謝の気持ちとこれから始まる生活に対する期待で胸がいっぱいだったことを、とてもよく覚えています。実習が始まってから今日までの5ヶ月間は、目にもとまらぬ速さで過ぎて行きましたが、病院というのちの現場で、子どもやその家族、そして医療者など、たくさんの人の思いに触れながら過ごした、学びの多い時間であったと思います。

実習先の北海道大学病院のチャイルド・ライフ・スペシャリス

トは腫瘍センターの中にある緩和ケアチームに所属しています。現在、支援を行っている病棟は、泌尿器科・循環器外科・脳外科・形成外科の4つの病棟です。これらの病棟は、小児病棟とは異なり、入院患者のほとんどが大人の一般病棟です。そこを生活の場とする幼い子ども達を対象に、主に遊びを通じた支援を行っています。

8月、夏休みを利用して、入院している子どもを見舞いに来た兄弟姉妹と一緒に遊ぶ機会がありました。弟を見舞いに来た9歳の女の子の「運動会、お父さんとお母さん両方に見に来てほしかったな。」ということばが胸に強く残っています。子どもの病氣と向き合う家族が抱える問題が病氣を治すことだけではないという現実を痛感した瞬間でした。家族の一員が入院することによって、家族全員の生活パターンは大きく変化します。特に北海道大学病院には、道内各地から治療のために入院することも達がたくさんいるので、家で待っている家族が病院から車で5〜6時間離れたところで生活しているケースが少なくありません。そのため入院することも付き添う母親と家で待っている兄弟姉妹は何ヶ月もの間、離れて暮らすこともあります。子ども療養支援士として、病氣のこともその兄弟姉妹、それぞれが頑張ったことを評価し、その気持ちを共有することの大切さや、それぞれが頑張ったこと、乗り越えたことを自己認識し、その経験を後の生活に活かすことができるようにサポートすることの大切さについて深く考えさせられた出来事でした。

実習の中で、人の思いに触れる機会がたくさんあります。子どもの思いや親の思い、兄弟姉妹の思い。どれも尊いものばかりで、ひとつひとつの思いに向き合うことに、ものすごいエネルギーが必要であることを日々感じています。後期実習では、真っ向から向き合うだけでなく、横並びの関係を築くことで相手に寄り添う姿勢を身につけ、人の思いにより敏感でいられるよう、目の前の課題ひとつひとつに丁寧に、一生懸命取り組む、さらに深い学びに繋げていきたいです。

### 羽土 英恵

子ども療養支援士認定コースの合格通知を受け取り期待と不安を胸に5人の受講生と顔合わせをしてから早半年が経とうとしています。この半年は講義と実習の濃厚な内容となっており4月が遠い昔のように感じてしまいました。

私は小児科の看護師として経験があり多くのお子さんにお会いしてきました。看護師経験のある方々は、医療体験において子どもが不安と恐怖で泣いている様子を見て心苦しい思いをされたことがあるのではないのでしょうか。私は自分の後ろめたさや罪悪感で「大丈夫」「ごめんね」という言葉を何度も繰り返していました。その言葉は子どものためではなく自分の思いをごまかそうとしてきたところがあるかと思っています。こうした

臨床経験があり、その現状に対してより子どもを擁護することはできないのかという思いから今回このコースを受講させていただくことになりました。

現在140時間の集中講義を終え、残りわずかになる実習に取り組んでおります。講義をしてくださった講師陣は国外でCLS、HPSの資格を取得し日本の病院にて活動されている方々や各専門分野において地位を確立された方々で、貴重な講義を受けることができました。そうした講義で学びえた知識を基に実践力に生かすべく日々実習から学ぶことも多くあります。

体調が悪く言葉を発することができず、ジェスチャーでのコミュニケーションをしていた4歳のお子さんのお話です。プレイルームには行きたくないという意思があり、それでもベッドサイドで遊びたいという希望がありました。ベッドサイドで遊べるおもちゃや本をもってその子の能動性を引き出す遊びを展開することで、はじめは寝転んでいたところから体を起こし、最後にはベッドサイドから降りてテーブルで遊びたいと意思表示してきました。表情も徐々に変化が見られ最後には遊びの中に私を巻き込もうとする主体性や笑顔も見られました。子どもの力を引き出す援助をすることでこれだけの変化があることはこの分野の専門性や必要性を実感することができ大変勉強になった出来事でした。

遊びを通して子どもの能動性を引き出し、また医療体験におけるコーピング能力を高めるお手伝いをするのが重要な役割であると感じています。私は実践力としてまだまだ乏しくこれからではありますが、少しずつ確実に変化が起こることを期待してできることから始めていきたいと思っております。

私たち研修生のために藤村先生をはじめ、協会やご指導いただく先生方、そして関心を持っていただきご支援いただくみなさまがあって、私たちがこうして貴重な研修を受けさせていたたいてに改めて感謝するとともに、今後ともご教授ご指導のほどをお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願致します。

## 割田 陽子

「子どもにとってやさしい医療」って何ですか？この職種を目指すにあたって、以前聞かれたことがありました。あの時、具体的な言葉ではっきりと答えられなかった自分にもどかしさを感じたことを覚えています。しかし、その答えを考えれば考える程、心の中にこの職種への熱い思いが溢れ、自分がここまで目指したいと思う、その理由って何なのだろう？と考えていた時、ある1冊の本に出会いました。その本の中の一節にこう書いてありました。

「泣いている子どもに対し、『泣きたいだけ泣きなさい。あなたの為に私がいるのですよ。』そういった気持ちで子どもと接する。安心できる環境があると子どもは失敗を恐れずいろん

なことに挑戦していく。」

私はこのような、ありのままの子どもを受け止める“あたたかいまなざし”こそが、子どもにとってやさしい医療、環境を作っていく上で大事なことであり、いつか自分がそいう存在になりたいと思うようになりました。

4月から前期研修が始まり、講義では、今後子ども療養支援士として活動していく上で基本となる、大切な知識や理論を学びました。

5月から順天堂での実習が始まり、1か月の前半は病院の子どもたちとひたすら遊び、後半は保育園の子どもたちと過ごしました。病気で入院している子どもたち、保育園で元気に遊ぶ子どもたち、両施設でのそれぞれの経験は、『子ども』を知るひとつの貴重な機会となりました。

順天堂での実習は、とても楽しく、日々充実しています。子どもとの距離のとり方、関係の作り方、そういった基本的なことを今まで考えたこともなかった私にとって、そこからのスタートでした。毎日が学びの連続で、あっという間に過ぎた4ヶ月でした。

9月から後期が始まりました。講義ではさらに貴重な学びを得て、現在は横須賀うまち病院のCLSの方々のもとで“子どもにとってやさしい医療”を実際に言葉だけでなく、実践に結びつけられるよう、実習をしているところです。

病気や入院といった困難な状況下にある子どもたちの傍に、“あたたかいまなざし”を持って寄り添い、安心を与えるCLSがいる。そのような中で、子どもたちが本来持っている力を発揮し、困難を乗り越えてゆく姿を見るたびに、この職種の重要性を改めて感じながら学んでいる日々です。

最後になりましたが、講義、マンスリーセッション、実習先などで、お世話になりました諸先生方、CLS、HPSの方々、丁寧で親切なご指導と、このようなたくさんの方の学びの機会を与えて下さったことに、心から感謝の気持ちでいっぱいです。貴重なお話をお聞きしたり、実際の活動を見学させて頂いたりといった、たくさんの方の経験は、私にとってかけがえのない財産であり、支えでもあります。

後期残りも「子どもにやさしい医療」を提供できる一員となれるよう、子ども療養支援士の専門性をさらに学び、深めていけるような実習にしていきたいと思っています。

## 藤岡 静香

養成プログラムが始まって早6ヶ月以上が過ぎました。緊張した面持ちで順天堂大学を訪れ、教育委員会の先生や他の実習生と出会ったことが遠い昔のように感じます。

大学では児童教育学を専攻し、大学に通いながら小学校でスクールサポーターや特別支援学級の介助員をしていた私にとって、医療の世界に足を踏み入れたのは初めてでした。

最初は、看護師さんの申し送りを聞いても何を言っているのかわからず、不安になりました。「大丈夫なんだろうか…」ととても不安になりました。しかし、毎朝、電子カルテを見ながら情報収集をし、わからないことをスーパーバイザーに教えてもらったり、自分で調べたりすることを繰り返すうちに次第にわかることも増えていきました。また、オリエンテーションで外来診察や放射線科、NICU などを見学させて頂き、病院における医師や看護師、技師など多職種の役割や責務を学ぶことができました。

前期実習では毎日、スーパーバイザーである HP 士(実習病院における HPS の院内名称)の活動をシャドーイングし、HP 士が行ったこと、話したことをつづきにメモを取りました。日誌ではその日の HP 士の活動をまとめ、感じたことや学んだことを書くのですが、子ども療養支援士としての視点がまだまだ不足しており、着目点がずれていたり、大切などころを見逃してしまったりすることもしばしば。一週間の日誌をスーパーバイザーと振り返る時間が3時間以上に及ぶこともありました。ため息まじりに「頑張ってるよ…」とつぶやくスーパーバイザー。申し訳ないと思いつつも、前期講義で学んだことと実践を結びつけて考えることができているように思います。

そんな状況が一変したのは後期実習に入ってからです。これまで、ばらばらになっていたパーツがつながり始めたように感じました。前期実習で HP 士の活動を見てきたので、後期講義の内容が理解しやすく、HP 士の活動の裏付けも理解できるようになったのではないかと自分なりに感じています。後期実習では HP 士の活動を見学しながら、なぜ HP 士がそのような言葉かけをしているのか、なぜそのような支援を行っているのか少しずつ理解できるようになりました。

前期実習の後半からは、実際に子どもたちと関わって遊ぶことも始まりました。初めて担当したのは IgA 腎症で入院していた 9 歳の男の子。スーパーバイザーから与えられた課題は「夢中になって遊ぶ」です。普通の遊びではなく、子どもたちが夢中になって遊べる遊びをセッティングできるか。この課題は今でも続いています。後期実習ではその上に「子ども主体」という課題も加わりました。

今後も引き続き子ども療養支援士として認定して頂けるように精進していきたいと思います。ご指導くださる教育委員会の先生方、実習の場を与えてくださっている大阪府立母子保健総合医療センターの職員の皆様、いつもありがとうございます。そして、今後ともどうぞよろしくお願い致します。



## 第3回総会の報告

茨城子ども病院 CLS 松井基子

日時:平成24年6月30日(土)

場所:順天堂大学9号館8番教室

上記の通り、第3回子ども療養支援協会総会がとり行われました。議案は以下の通りです。

- ・第1号議案 平成23年度事業報告
- ・第2号議案 平成23年度終始決算報告及び監査報告
- ・第3号議案 平成24年度事業計画案及び予算案承認の件
- ・第4号議案 役員選任の件

田中事務局長より平成23年度の協会の活動報告と本年度の事業計画案が報告され、増子監事より決算報告がなされました。また、役員選任案も承認され、新しく3名の理事と2名の監事が新任されました。参加者は78名(うち会員41名)でした。

特別講演では、「障がいや病気の子もたちも人として成長できるように」というタイトルで門野晴子先生から、主に広汎性発達障害の子も達の権利と擁護についての興味深いお話がありました。また、パネルディスカッションでは、「子どもと家族中心の医療と私たち～CLS、HPS、子ども療養支援士の活動に対する医療職のまなざし～」というテーマにて横浜済生会病院小児科 CLS井上絵未さん、同病院小児看護専門看護師の関根和子さん、横須賀うわまち病院小児科CLS阿部智慧子さん、同病院小児科部長の宮本朋幸さん、成育医療センターCLS伊藤麻衣さん、大阪母子保健総合医療センター小児外科部長 窪田昭男さん、順天堂大学小児科 子ども療養支援士 伊藤智美さん、順天堂浦安病院 小児科病棟師長石川あけみさんから、お話を頂きました。実際に現場で CLS、HPDS、子ども療養支援士として活動を行う方々の実践報告を中心に、その活動を評価と期待について医師、看護師の皆様と語って頂きました。総合討論では、このような専門家がいることで、子どもや家族が変わっていくことができる、その可能性についての様々な意見を会場の皆さまと共に交わす事ができました。今後も、現場での活動報告のみで終わらずに、子ども療養支援士(CLS、HPS 含む)当の専門性やその役割をどのように伝え理解を促し広めることができるのか、協会としても重要な課題であると思われた一日でした。



## 新役員のご紹介

平成24年度より、新しく理事、監事、諮問委員にご就任頂きました先生方から5名の先生方より、ご挨拶をかねて紹介させて頂きます。(役員更新の詳細は子ども療養支援協会ホームページをご参照下さい)

子ども療養支援協会 理事  
宮城県立こども病院 理事長・院長 林 富

子ども療養支援士協会の理事を仰せつかった林 富(はやしゆたか)です。東北大学小児外科に30年ほど勤務し、平成20年から宮城県立こども病院に勤務しています。近年、小児の治療成績は飛躍的に改善しましたが、治療を受けるあるいは受けた子ども達とご家族には、多面的なtotal careが必要と考えていました。小児医療におけるCLS、HPS、子ども療養支援士の役割は重要です。多くの小児医療施設で皆さんが活躍することを願っています。

子ども療養支援協会 理事  
沖縄県立看護大学 蝦名 美智子

私は看護師です。15年前(H9)から「検査・手術を受ける子どものインフォームドコンセント—看護の実態とケアモデルの構築」というテーマで小児看護の状況をかえることに四苦八苦してきました。その途上で故野村みどり先生、後藤真千子氏、田中恭子先生達に出会い、そのご縁で理事を拝命することになりました。が、やっぱり看護師、医師、検査技師等の医療職が子どもに説明しないで処置を始めてしまう状況に注意が向きます。これからは子ども養育支援士の皆さんのお力をいただきながら、医療職の意識を変えながら病院にやってくる子ども達の「処置に向かう勇氣」を創出して参りたいと考えています。よろしくお願い致します。

子ども療養支援協会 監事  
弁護士 後藤 真紀子

この度、監事に就任させていただきました弁護士の後藤真紀子と申します。2011年に日本弁護士連合会で行った人権擁護大会のシンポジウムの準備の中で、田中恭子先生に順天堂大学の小児科を見学させていただいたことが、関わらせていただくきっかけとなりました。当時、乳児子育ての真っ最中で、当事者としての目線も持っていたこともあり、現場で子どもの立場に立って日々実践されている早田さんのお話を伺い、大変感銘を受けました。勉強させていただくことばかりですが、「子ども療養支援士」という資格がきちんと整備され、社会に浸透していくことができるよう、お力になればと思っております。

子ども療養支援協会 監事  
弁護士 平原 興

弁護士として、患者の権利の法的保障を求める活動を行う中で協会の活動を知り、本年より監事に加えて頂くこととなりました。学び育つための豊かな環境を求めることは子ども達の権利であり、それを実現することは社会の責任です。子ども達の成長の場となりうる、豊かな療養環境を作れるよう、協会の活動を通じて、微力ながらも精一杯務めたいと思います。よろしくお願い致します。

子ども療養支援協会 諮問委員  
大阪府立母子保健総合医療センター小児外科 窪田 昭男

多くの小児病院あるいは小児病棟では、幼少児の長期入院に伴う発達障害や精神的苦痛を取り除くことの重要性、あるいは手術や検査などに伴う身体的、精神的苦痛を軽減するための配慮(プレパレーション)の必要性が認識されてきている。従来、これらのタスクは看護師、医師、臨床心理士あるいは保育士が担って来たが、近年、CLS、HPSあるいは子ども療養支援士(CCS)が専門的立場からこれらを担う施設が増えてきた。しかしそのアイデンティティーは確立されていない。すなわち、従来の職種との業務の棲み分け、新たな専門職として何をなすべきか、何ができるのかが明確にされていない。アイデンティティーを確立させるための新しく且つ重要なタスクの一つは青少年の居場所を作ってやることである。青少年の中には軽からぬ機能障害、先天性疾病や悪性腫瘍の遺残症をキャリアオーバーしている患児がいるが、彼らが悩みを抱えた身を置き、悩みを聴いてもらいあるいは悩みを発散させる場所が要るのである。

## 子ども療養支援士より活動報告

順天堂大学医学部附属順天堂医院  
子ども療養支援士 伊藤 智美

私は2012年4月より順天堂医院小児病棟で子ども療養支援士として働いています。

順天堂医院ではこれまではチャイルド・ライフ・スペシャリスト(以下、CLS)、ホスピタルプレイスペシャリスト(以下 HPS)による活動が中心でありましたが、今年4月からは子ども療養支援士が、8月からは小児病棟専属の臨床心理士、保育士もそのメンバーに加わり、更に子ども達一人一人のニーズに合った関わりを提供することを目標に活動を行っています。また、多職種がそれぞれの専門性を活かしながら、入院生活をおくる子どもや家族により充実した心理・社会的支援を提供できるよう“子ども養育支援チーム”が立ち上がりました。子ども療養

支援チームは、小児病棟看護師長、小児看護専門看護師、臨床心理士、CLS、子ども療養支援士、保育士、医師といった職種で構成されており、それぞれの立場で療養生活を送る子どもと家族を多方面に渡って継続的に支援することを目的としています。子ども療養支援チームの中で、子ども療養支援士はCLS共に、主に、治癒的遊び、プレパレーション、ディストラクション、きょうだいを含めた家族支援、グリーフケアを中心とした業務を担っています。

私が順天堂医院で子ども療養支援士として働きはじめ、八か月が過ぎようとしています。なかなか思うように仕事が出来なくて落ち込んだ日も、子どもや家族に「ありがとう」と言葉をかけられ嬉しくて鼻歌を歌いながら家路についた日も、振り返ればどれも私にとって糧となる大切な日々であったように思います。これからも一日一日を大切に、どんな出来事も自分の糧としていきながら、少しずつではありますが、子ども療養支援士として精進していきたいと思っています。

当協会ではこのようなボランティア活動への参加も有志で継続的に行っていきたいと考えています。

## 教育委員より活動報告

当協会では、年に5回のマンスリーセッションを設け、教育委員より研修生に理論と実践を結びつけるための指導を行っています。今年マンスリーセッション担当教育委員よりマンスリーセッションの報告を致します。

国立がん研究センター中央病院 小児腫瘍科CLS 石田 智美  
国立成育医療センター小児科CLS 伊藤 麻衣

子ども療養支援士認定コースのカリキュラムの中に、「マンスリーセッション」という時間があります。これは、実習のため全国各地にいる研修生が一堂に会し、①日頃の実習状況の報告・情報交換をおこなう ②各回で設定された課題(「アセスメント」や「遊び」等)に即し、実践につながるディスカッションやロールプレイ、発表をおこなう ③修了プロジェクトについて討議し、内容や発表方法について準備を進めてゆく、という3つの項目について、研修生が主体となって進めてゆく、この養成コースの中でも特徴的なカリキュラムです。

今年度は合計5回を予定しており、CLSなど担当の教育委員はスーパーバイザーとして時折アドバイスをしながら見守っていますが、回を追うごとに研修生同士が打ち解けて、討議内容も濃く、より実践を意識したものとなっているのを感じています。何より、実習を経験した者同士だからこそ分かり合える悩みや疑問、達成感や喜びをワイワイと話しながら共有することで、研修生自身が日頃の思いを消化し、その後の実習や子ども療養支援士になるにあたっての意欲向上につながって

いるのではと思います。

第3回のマンスリーセッションは、10月21日に札幌市(北海道大学病院内)でおこなわれ、その前日に開催された「日本チャイルド・ライフ学会 第12回カンファレンス～子どもにやさしい環境・検査・処置をめざして～」をテーマに討議をおこないました。プレゼンテーションの方法論や子ども療養支援士という職種を他の職種や立場の方々にどう伝えていくか、という討議も活発におこなわれましたが、私自身は「発表の症例を通して、CLSや子ども療養支援士でしかキャッチできない不安やニーズがあることを学びました。」という感想が印象的でした。このマンスリーセッションを通じて、子ども療養支援士にとって一番必要な、「こどもの不安や思いをキャッチする感性」も磨いていただけたら、と考えています。

## 社会活動報告

今年も協会会員有志で、様々な社会活動にボランティア参加しました。子どもの心と身体成育ネットワーク主催である東日本大震災子どもの心のケアプロジェクトであるサマーキャンプへの参加には、研修生の羽土英恵さん、割田陽子さん、田中事務局長がそれぞれ参加し、NPO法人子ども健康フォーラム主催である東日本大震災支援プロジェクトには、子ども療養支援士の伊藤智美さん、研修生の羽土英恵さん、田中恭子事務局長が参加しました。その一つをご紹介します。

### 東日本大震災支援プロジェクトに参加して

2012年8月28、29日、「NPO法人子ども健康フォーラム」の活動の一環である「東日本大震災支援プロジェクト」の活動に参加致しましたのでご報告させていただきます。2011年3月に発生した東日本大震災では、子ども達も含めた多くの方々が被災に遭いました。このような現状を受け「NPO法人子ども健康フォーラム」では被災にあった東北地方の病院の子どもたちへ玩具を寄贈することを通じて、子どもの療養環境のより良いものとするを目的とする「東日本大震災支援プロジェクト」を実施しました。今回私たちは現場の生の声に耳を傾けながら、被災地の病院にいる子ども達へ寄贈された玩具が現地でより有効に活用できるように相談や助言を行う“支援スタッフ”として宮城県の病院を中心に現地訪問をさせていただきました。

訪問させて頂いた病院は、塩竈市立病院、赤石病院、宮城厚生協会坂総合病院、宮城県済生会こどもクリニックの4つの病院です。訪問先では、医師や看護師、保育士等のスタッフに寄贈した玩具で遊ぶこども達の様子や今後の活用の仕方を中心にお話しをお伺いしました。こども達が実際に玩

具を使う様子をまるで自分のことのように嬉しそうにお話してください。時には震災当時の苦しく辛かった状況や、現在も続く震災による医療スタッフ、子ども達への心理的な影響もお話してくださいました。一見、震災前と変わらぬ生活に戻ったように見えても、被災した方々の心の中には変わることなくあの日の出来事は存在し、今も影響を及ぼし続けているのだと実感しました。そしてどの病院のスタッフの方も皆、スタッフ同士で支え合いながら、懸命に子どもを思い、子どもの笑顔を少しでも増やしていこうとされている姿がとても印象的でした。そのような訪問先のスタッフの方々の姿勢を見ていると、いつのまにか支援する立場であるはずの私自身が励まされ、勇気もらい、温かい気持ちになっていました。

今回、このような大変貴重な機会を与えていただき、訪問先で出会った方々の子どもを思う熱い思いに感銘を受け、自分自身の普段の活動を振り返る大変良い機会となりました。

(伊藤智美、田中恭子)



写真Ⅰ 塩竈市立病院

きょうだい遊びながら待つことの出来る点滴室



写真Ⅱ 済生会こどもクリニック

看護師さん達が作成した子どもへのご褒美

## 子どもの広場

子どもたちの作文や作品を掲載するコーナーを設けました。子ども自身が作る文章、そして描き出す作品には、ハッとさせられるような気付きや思い、そして力強さが在ります。このコーナーでは、そんな子ども達の想いや願いをご紹介しますためのコーナーです。同じ協会ホームページにもこのようなコーナーを設けましたので、ぜひご鑑賞ください。

初回は、莉勢さん(小学校5年生)です。莉勢さんは、生まれながらの病気があり小児科、整形外科に通院しています。毎月の通院は数回にわたりますが、学校での勉強が大好きです。特に算数と英語が大得意な女の子です。そんな莉勢さんから皆様へのメッセージをお送りします。

### 私の願い

佐々木莉勢

わたしの願いは一人で歩けるようになることです。

わたしの願いは、自由にしゃべれるようになることです。

そして、わたしの願いは、みんなの中に自然になじんで、目立たなくなることです。

どこへ行っても、わたしはいろいろな人から見られたり、時には「かわいそうだね。」とか、「えらいね。」などと声をかけられることがある。

たいていは、自分の祖母と同じくらいの女の子の人が、いやらしい目つきでわたしを品さためしようとする時に、わたしにかけられる言葉だ。どうしてななめからしかわたしを見ようしないのだ。

わたしは怒りと悲しみでふくれあがって、心からわき出る毒素をかけてやりたい気持ちにおそわれる。でも、わたしは次に考えなおす。ああ、わたしがこの人を受け入れなければ、わたしがこの人に受け入れられることはないだろうと。わたしは、かわいそうでえらいという表現だけでしか、自分を受けとめてもらえないのは、とても不満だ。なぜなら、日常や学校生活の中で、わたしがたちむかわなければならなかった困なんやへん見をすべて乗り越えて来たからだ。また、苦しみもがわたしを支えてくれる人が何人もいたからだ。これは、かわいそうでえらいのではなく、ものすごい幸運で、すばらしいことなのだ。

何も持たない自分を受してくれる人がいるということが、どんなに幸福なことだろう。

だからわたしは、自分にかなり自信がある。

そして、これからもきっとたびたびいやな思いをしても、ひるまずにどんどんと人の中に入っていきこうと思う。

だって、心の中で願っているだけでは何も実現しないのは、今までの経けんでよくわかっているから。

願いは目ひょうであって、かなわない夢ではないから。

願いをかなえようと努力する自分がかがやいていると思うから、わたしは毎日がんばれるのだ。

## 事務局からのお知らせ

### ● 年会費の納入のお願い

平成 23・24 年度会費(3,000 円/年)未納の会員の方は下記口座までご入金の際、宜しくお申し上げます。  
振込先:みずほ銀行 本郷支店 「普通」2813671 子ども療養支援協会

### ● 第 1 回子ども療養支援協会シンポジウム開催のご報告

\* 日時:平成24年11月23日(金)

\* 場所:大阪市立総合医療センターさくらホール

全国から約120名の方々の参加がありました。子ども療養支援士になりたい大学生、療養生活を送る子どもとそのお母様、子ども療養支援士、心理士、弁護士と様々な立場の方々から“今なぜ子ども療養支援士なのか”についての理解を深めました。

本シンポジウムのご報告は次号でご紹介致します。

### ● 今後の予定

子ども療養支援協会での行事

平成 25 年 1 月 26 日(土)	マンスリーセッション 教育委員会	東京
平成 25 年 2 月 23 日(土)	認定会議	東京
平成 25 年 3 月 16 日(土)	諮問委員会 研修修了式	東京

来年度の子ども療養支援協会総会は平成25年5月25、26日に開催予定です。

会期中には特別講演、ワークショップ、一般口演を予定しております。詳しくはホームページ上に掲載して参りますので、皆様奮ってご参加ください。

## 編集後記

2013年、新しい年を迎えました。2010年12月4日に設立された当協会も3年目の活動をスタートさせました。私たちの目指す協会の役割の一つには、どんな病気をもっている、その子どもの存在そのものを擁護し、そしてその家族と共に支える、このような役割を担う一つの専門家としての“子ども療養支援士”を育てること、が挙げられます。“初心忘るべからず”。2013年も、この初心を胸に携え、奮闘しながら活動を遂行して参ります。

2013年、この年が皆様にとって素晴らしい年になりますよう祈年致しております。

子ども療養支援協会事務局（事務局長 田中恭子）  
〒113-8421 東京都文京区本郷 2-1-1 小児科研究室内  
Tel: 03-3813-3111 / fax: 03-5800-0216  
e-mail: kodomoryoyoshien@yahoo.co.jp